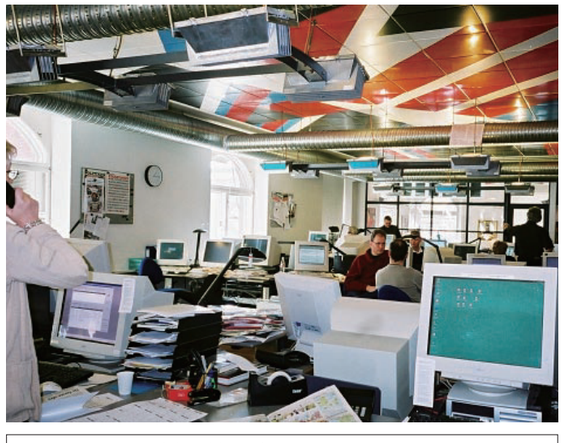
総合学習	デンマークの「教育のための社会」 ―ユニークな学校新聞と体験型新聞教育施設―

デンマークを代表する全国紙のポリチケン社では、教科書会社のグルンデと協力して、今起こっている環境問題や戦争などを、子供達にもわかるよう工夫された学校用新聞を作っていた。「子供のための新聞」は24ページと詳しく決して手を抜くことはないという。保護者より「一般の新聞よりわかりやすいので、ぜひ買いたい」という注文も多いとか。

また、ユランズ・ポステン社には、電子メディアを利用して新聞づくりができる「メディアリウム」というユニークな体験型教育施設があった。ちょうど私が訪ねた時、15才前後の生徒28人が、コンピューター画面を通しての模擬取材を行い新聞を作る体験学習を行っていた。この施設は、まるで小さな都市のようになっていて、病院も警察も何でもある。生徒全員に携帯電話が渡され、取材も新聞社からの指示もすべて電子メディアを通して行われていた。はじめに「食中毒で13人の生徒が緊急入院!」という共通のテーマが与えられる。「病院に行って主任医師と会ってインタビューせよ」「血液検査の結果はどうか」など次々と指示が流れ、記者となった生徒たちは原因と発生源をインタビューと情報収集により追跡して行く。「名前は出してもよいか」「整合性や信ぴょう性はあるか、公表はできるか」など「倫理」や「モラル」についても検討が行われる。そして、全員が集まる編集会議では、取材内容の違いに気づいたり、「何が真実で何が真実でないのか」といった再検討が行われた。最後は、「防虫剤を作っている会社の廃液が湖に流れ込み、その湖で泳いだ子供達が入院した」という環境問題に行き着く。

首都コペンハーゲンの中央広場に
位置するポリチケン新聞社


ポリチケン新聞社の各セクションのデザインは
それぞれ異なり工夫が施されていた

しかし、ここで「大きな列車事故発生!」を知らせる警報が鳴り、生徒たちは緊急事態に対して、手分けをして全員による取材が続行される。約2時間の中で、取材した環境問題と列車事故という2つの記事を、限られた紙面の中でどの程度扱うのか、記事の大きさやレイアウトはどうするかなど再検討を行う。生徒たちは、新聞社の協力を得て現実の新聞づくりのプロセスを体験していた。

ユランズ・ポステン社のユニークな
体験型教育施設「メディアリウム」

生徒たちは多様な電子メディアを利用して、
取材から編集会議まで楽しみながら体験していく

「環境教育に求められるNIE」

私は、県立浜松城北工業高校で「環境教育」に携わっている。今、北極域では気温上昇により海氷が溶け出すなど急速な気候変動がおこっている。また、大規模な洪水や干ばつ、巨大ハリケーンなど世界各地で異常気象が報じられるように、地球温暖化をはじめとする地球的規模の環境問題は、人類の「生存権」をかけた21世紀の最重要課題となっている。こうしたことから、環境先進国をはじめ今、世界では生涯にわたる「環境教育」が求められている。「新聞を活用した環境教育（NIE）」は、23年間の私の経験から最も効果的な授業方法のひとつであると考える。例えば、地球温暖化問題では、新たな観測データや科学的知見が次々と報告され教科書ではその変化に到底追従できない。しかし、毎日届く新聞なら可能である。また、最先端のコンピューターやプログラム技術をもってしても自然の変化や世界各地で起こる異常気象を予測することは困難である。しかし、現実に起こっている災害を報じる新聞なら気象の異常を実感することができる。さらに、各国の自然や環境に対する価値観の違いや世界の経済動向、だれが大統領になったか等によっても、世界の温暖化対策は大きく変わる。こうしたことも新聞なら生徒も教師も共に深く考えることができる。さらに新聞は、多くの読者がおり社会的にも検証され、生涯にわたり家族で地域のこと、世界のことを話し合うことができる。環境教育で大切なことは、「関係性」、「全体性（観）」、「多様性」などを総合的に学び続けることである。そして、子供の素朴な疑問に大人が気付く「子供が大人を教育する」という「賢い家族」、「賢い市民」づくりが、お茶の間で行われていくことが「新聞による環境教育（NIE）」の最も良い点であると考える。私が「教育のための社会」づくりに取り組む環境先進国スウェーデンの新聞社を訪れた時に聞いた「新聞は教科書ではありません。しかし、すばらしい教材です」という言葉が、今でも私の心に残っている。この言葉は、私の「NIE（Newspaper in Education）による環境教育」の原点となっている。